

# 25 Ae 区発掘調査の成果

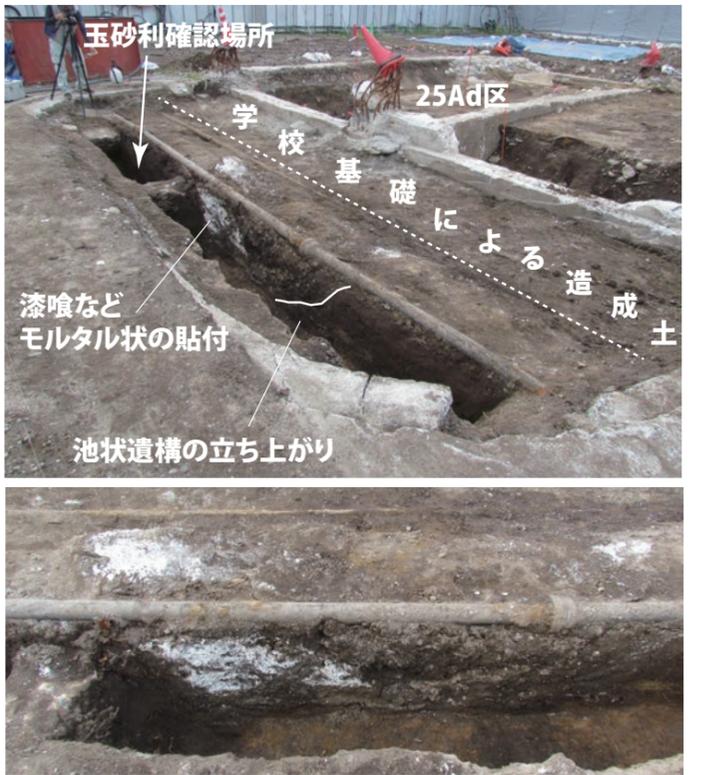
25 Ae 区は、旧北校舎エリアの最も南西側に設定された調査区です。かつての北校舎の南に接して設けられていた、花壇などがあつた場所に当たります。調査区の西端が25Aa区同様に、成瀬隼人正中屋敷の建物東端に当たるようです。その場所で見つかった、特筆すべき遺構についてお知らせします。

場所は25 Ae 区西端で、長さ十メートルほどの範囲です。近代の整地層を除去したところ、白色の塊を表面で検出することができました。調査区南端を深く掘って断ち割ったところ、この白色の塊が大きな落ち込み中央に存在していることに加えて、落ち込みの底面には粘土層に玉砂利が埋め込まれている様子を見ることができました。さらにこの粘土層を詳細に見ると、沈鉄を多く含み、水が溜められた場所であつたことが分かりました。

この遺構も、池状の遺構であつたと考えられます。調査の制約上、平面的な広がりや完全には確認できていないものの、25Aa 区の遺構に比べてやや小振りであつたようです。絵図面では、当地付近は「御水屋」と記されています。25Aa 区の遺構とは役割が異なっていたかもしれませんが。(川添和暁)



25 Ae 区 池状遺構底面の玉砂利



25 Ae 区 池状遺構 (上: 全体、下: 土層断面)

# にしふたばちょう 西二葉町遺跡発掘通信

No. 11  
令和7年  
8月号

## 地元説明会を開催します

明和高等学校・附属中学校の皆様並びに近隣の皆様には、発掘調査への御理解と御協力をいただきまして、誠にありがとうございます。お蔭様で二年に渡る調査も終盤に差し掛かり、中高一貫校としての新たな歩みを始められた学校の中で、先人が遺した様々な足跡が浮かび上がってまいりました。

そこでこのたび、今年度の発掘調査現場において、左記のとおり地元説明会を開催します。新たな学校風景へ転換していく過程の一コマを、そして、今しか見ることができない遺跡の姿を是非御覧ください。御来場をお待ちしています。

(センター長 伊藤尚巳)

## 西二葉町遺跡地元説明会について

日時 令和七年九月十三日(土)・十四日(日)  
全体説明は、午前十一時〜、午後二時〜

内容 発掘調査現場での説明と出土遺物の展示をします。雨天などの場合、発掘現場での説明は中止となります。詳細は、愛知県埋蔵文化財センターホームページでお知らせします (<http://www.maibun.com>)。

問合せ先 愛知県埋蔵文化財センター調査課 〇五六七・六七・四一六三  
川添職場携帯 〇八〇・一五七一・四九八九

# 西二葉町遺跡地元説明会のご案内



※学校敷地東門よりお入り下さい。 ※駐車場はありませんので、ご来跡は必ず公共交通機関をご利用下さい。

# 西二葉町遺跡発掘通信 No. 11 令和7年8月号

編集・発行 公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団  
愛知県埋蔵文化財センター



〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802の24  
電話 (0567) 67-4161【管理課】4163【調査課】  
ホームページ <http://www.maibun.com>  
Facebook <https://www.facebook.com/maibunaiichi>  
Instagram <https://www.instagram.com/aichimaibun/>  
X <https://twitter.com/aich>  
印刷・協力 株式会社イビソク

### 25 Ab区発掘調査の成果その②

25 Ab区は、旧北校舎エリアの最も西側に設定された調査区です。本号では、江戸時代の様子についてお伝えします。

この調査区では特筆される遺構が見つかりました。壁および底面を白いモルタル状のもので固められた大きな遺構で、平面は南北五メートル・東西四メートルの四角い形をしていました。この遺構は江戸時代の整地層の上方から掘込まれており、深さは一メートルに達するところもありました。東側には樋状の部分がつながっています。固められた粘土が何層にも重なっていたことから、何層も補修などが行われたようです。土層断面で観察すると、水が溜められた痕跡が沈鉄層（水中の鉄分が沈殿・堆積した層）として

25 Ab区は、二面目と三面目からは江戸時代の大型土坑や地形の窪地が見つかりました。これらはゴミ捨て場として使われたようで、土器や瓦の破片などが多数出土しました。

今回出土した遺物の中で紹介したいのは焼塩壺<sup>やきしおづぼ</sup>です。焼塩壺は江戸時代に用いられた食塩用の容器で、コップのような形をしています。この中に粗塩を入れて焼くことによって不純物を除去し、精製塩を作っていました。塩は焼塩壺に入ったまま生産地から流通していました。壺の表面には製造元の刻印があり、この刻印は焼塩壺がいつ流通し、使用されたかのヒントになります。

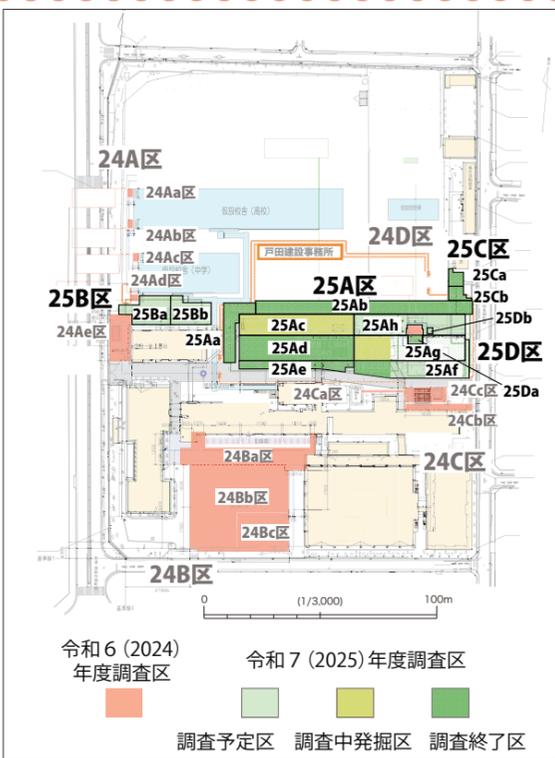
25 Ab区では、「泉湊伊織」や「サカイ／泉州磨生／御塩所」（18世紀中頃に流通）が同じ捨て場から出土し、別の捨て場からは「天下一堺ミナと藤左衛門」（17世紀中頃に流通）の刻印を持つ焼塩壺が出土しました。刻印だけではなく、壺の作りかたにも時代が反映されます。「天下一堺ミナと藤左衛門」は先に底を作り、その上に粘土紐を輪っかにして積み上げて作ります。それより百年あと



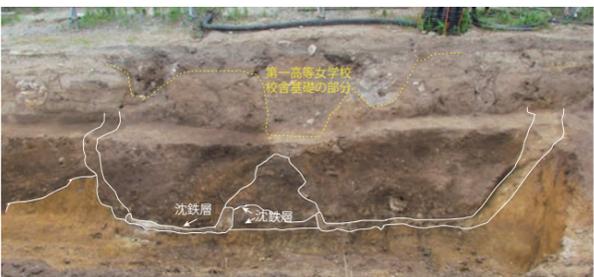
25 Ab 区の窪地。窪地を埋める土の中から土器や瓦が多数出土した。



25 A a 区 池状遺構 上：全体、下：底面から



西二葉町遺跡 24 区・25 区 調査区位置図



25 A a 区 池状遺構 土層断面（調査区西壁）

て何層も見られました。さらに、遺構中央は、小山のように盛り上げられていたことも分かりました。この遺構は江戸時代の後半に造られたようです。

江戸時代の成瀬隼人正中屋敷の時は、調査区の場合は屋敷建物の東端に当たる位置であったと考えられます。絵図面では、当地は「庭」と記されています。この記載を参考にすれば、池状遺構は、庭内にあった施設であったと推定されます。（川添和暁）

に作られた、「泉湊伊織」「サカイ／泉州磨生／御塩所」の刻印のある焼塩壺は粘土板を型に巻きつけて筒を作り、筒の片方の穴に粘土のかたまりを詰めてコップのような形にします。

型を用いるため、こちらの方がサイズを揃えて生産ができます。

焼塩壺は公家や武家、寺院、富裕な町民の町屋敷から出土することから、当時の高級品であったと考えられています。尾張藩主付家老・犬山城主を何代にもわたりつとめた、成瀬家の暮らしが垣間見える資料といえるでしょう。



焼塩壺（正面から） 5cm

焼塩壺（下から）

右ふたつは粘土板を巻きつけて筒を作り、片方の穴に粘土を詰めてコップのようにする。粘土が押し込まれたボコボコが底に残る。左はあらかじめ粘土で底を作るため、底が滑らか。



焼塩壺と一緒に出土した「延享四年」（1747年）と書かれた土器